

ワークショップの効果と課題に関する調査ⁱ（要旨）

このたびJIYDは京都大学大学院医学研究科（健康情報学分野）と協力して、ワークショップの効果と課題についてのアンケート調査を行いました。調査対象者は2009年と2010年の夏休み期間中、日本各地で開かれた63回のワークショップの受講者のうち、小学校、中学校の教員として登録されていた1,383名で、438名から回答をいただき、属性について登録通り教員と回答があった416名（内小学校教員43.3%、中学校教員56.7%）を解析対象としました。主な内容は下記の通りです。

主な質問内容と結果

①ワークショップに参加した価値があったか

回答者の約95%が参加した価値があったと答え、どちらも言えないが約5%、価値がなかったと答えたのは0.2%（1名）でした。また「あった」と答えた人が何に価値を感じたかについては、「ライフスキルについての理解」が46.9%、ライフスキル教育についての理解」が51.9%、「新しい指導方法を習得できた」が61.5%でした。

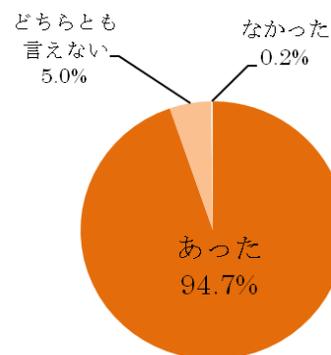


図1 ワークショップに参加した価値があったか

②ワークショップで学習した指導スキルを教育活動の中で活用したか

小学校教諭では67%、中学校教諭では63%が活用したと答え、基本的に授業を持たない養護教諭と管理職もそれぞれ59%、47%が活用したと答えました。教科指導、特別活動の他、道徳、生徒指導、クラブ活動など多様な場面で活用されていました。

③自分自身のライフスキルに好ましい変化があったか

児童生徒への接し方については42%、課題や問題の受け止め方については46%、自尊感情については32%が好ましい変化があったと答えました。回答者の61%が1つ以上変化があったと答え、19%は3つとも変化があったと答えました。

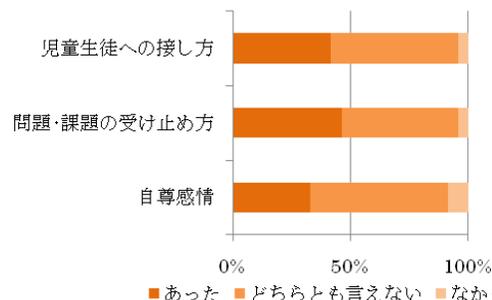


図2 自分のライフスキルの好ましい変化があったか

④ライフスキルの授業を実施したか

受講後ライフスキルの授業を実施したのは09年度で約50%、10年度で約33%でした。実施したと答えた人のうち学校として組織的に実施したのは41%で、残りの59%は個人的な実施でした。

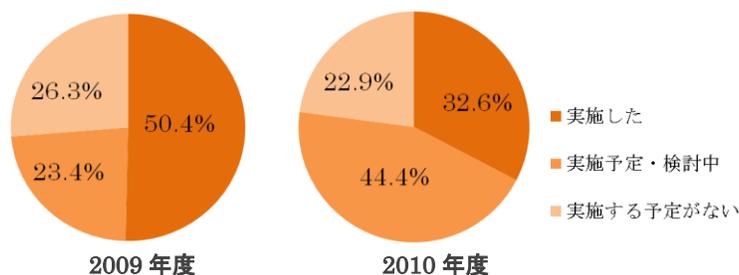


図3 ワークショップ受講後の授業実施割合

なお、回答者の約4分の1が今後とも実施する予定はないと答えていますが、その理由の多くは「実施したいが担任でないなど実施する立場ではない」、「実施したいが授業時間の確保ができない」などでした。

⑤教員のライフスキルの好ましい変化と授業の実施割合（上記③と④の関係）

授業実施と、教諭について先に挙げた自分自身のライフスキルに好ましい変化があったかの回答とクロスさせてみると、好ましい変化が3つあった回答者の授業実施割合は62.1%、2つあった回答者では47.7%、1つあった回答者は45.7%、なかった回答者は36.9%でした。自分自身のライフスキルに好ましい変化があったと回答した数が多いほど、授業実施割合が高いという結果となりました。

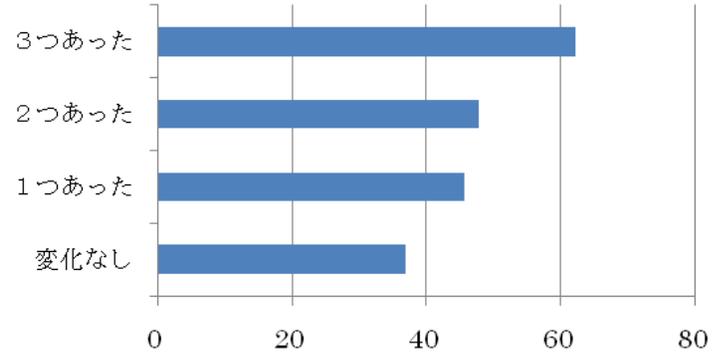


図4 ライフスキルの好ましい変化の数と授業実施割合 (%)

⑥学校で組織的にライフスキル教育を実施するうえでの課題

ライフスキル教育(授業)を学校で組織的・計画的に実施しようとした場合、どのような課題が考えられるかの回答について、最も重要だと思われると選択されたものに3点、次に重要なものに2点、3番目に重要なものに1点を配しました。

「授業時間の確保」は306名が選択し、重要度の平均得点は2.4でした。回答者の多数は授業、準備、研修のための時間の確保をあげ、次に教員間の合意をあげました。予算や教育委員会の承認を課題としてあげた人は多くありませんでしたが、あげた人はその重要性を中～上位と考えていました。

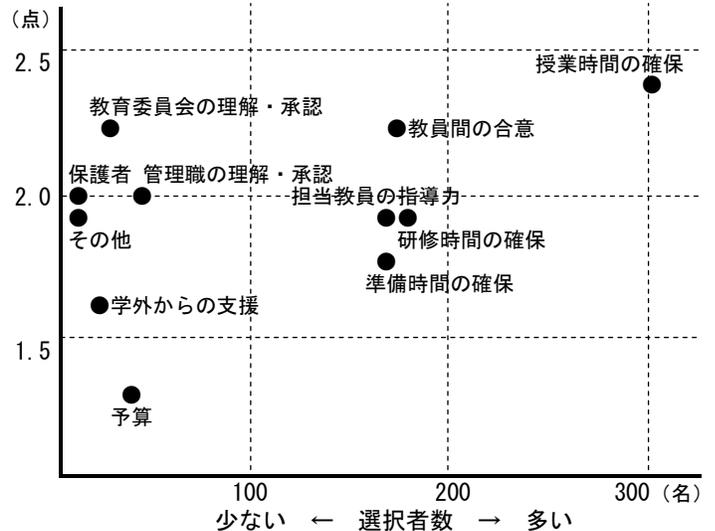


図5 ライフスキル授業の組織的実施の課題

まとめと考察～今後に向けて

● 教員研修としてのワークショップの価値

受講者の多数は参加したことに価値があったと考え、教諭のみならず管理職や養護教員なども、新しい指導方法を習得できたことに価値を感じ、学習した指導スキルを教育活動のさまざまな場面で活用していました。自分自身のライフスキルが高まり、児童生徒への接し方やなどに変化があったと答えた人も多数いました。これらの結果から、ワークショップがライフスキルの授業を実施するかどうかに関わらず、教師力、人間力を高める教員研修としての価値も持つとも言えます。

● 教員のライフスキル向上と授業実施割合

指導方法の習得を主目的とするワークショップでありながら受講者自身のライフスキルが改善され、さらに回答者のライフスキルの好ましい変化の数と授業実施割合に正の関係性がうかがえたことは、回答者から得られた一つの知見として大切にすべきだと思われます。

受講者が学校でライフスキル教育を組織的・計画的に実施してゆくためには、ライフスキル教育の必要性や効果を職場で提言し、校長や教員仲間を説得し、時間を確保するために進んでカリキュラムを改善するなど、ライフスキルに関する知識とは別の力、すなわち受講者自身のライフスキルと、それを遂行する意欲や自己効力感が求められます。そういう意味で、ワークショップでは指導方法に加え、受講者のライフスキルの改善により焦点を当てるのが、今後のライフスキル教育の普及、学校での実施の促進につながるのではないかと推測されます。

● 学校での組織的な実施に向けての課題

ライフスキルの授業に関しては実施を希望しながらも実施できていない人も多く、特に学校での組織的な実施に関しては時間の確保や教員間の合意という「障壁」があることがわかりました。

この課題の根本的解決にはライフスキル教育が学校で教科として位置づけられる日を待たなければなりません。別の観点で見ると時間の問題が解決できれば、現在の教育制度の元でも組織的・計画的に実施することは可能であるということが出来ます。すでにわが国では全校で組織的・計画的にライオンズクエストのプログラムを実施している学校(=モデル校)が約50校ありますので、これらの学校では時間の確保をはじめとする課題をどのように解決したのかという情報をワークショップで共有することが必要かつ効果的だと思われます。

● 今後のプログラムの課題

現在ワークショップ終了後受講者に対する情報提供や、受講者からの情報収集などのフォローアップ体制がなく、学校でのライフスキル教育をサポートする体制が十分ではありません。

ワークショップの最終的な成果が子どもたちの好ましい変化とすれば、今後の運営にあたっては、Kirkpatrick modelなどの評価モデルを参考に、評価システムそのものをプログラムに組み込み、ワークショップの評価と受講者からの意見聴取、そしてライフスキル教育のサポートを継続的に行う体制を構築することが望まれます。

レベル1：反応

ワークショップに参加したことへの満足度、価値評価

レベル2：学習

ワークショップ参加による受講者の知識やスキルの向上、態度の好ましい変化

レベル3：行動

知識・スキルの教育活動への活用、授業の実施など、仕事上の行動の変化

レベル4：結果

レベル3の成果としての、児童生徒のライフスキルの向上

表1 Kirkpatrick modelの評価基準とワークショップ評価への応用

ⁱ 2011年4月「ライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育』ライフスキル教育指導者養成ワークショップの効果とライフスキル教育の課題に関する調査」(事務局：特定非営利活動法人 青少年育成支援フォーラム (JIYD)、調査者：北山敏和 京都大学医学研究科 ライオンズクエスト認定講師)